

社会科を専門としていない私が、このような機会を得られるなどは夢にも思っていなかった  
ので、感謝の気持ちと共に不安な思いも大きく、短期間に、にわか勉強をしての参加となった。

### 1 結団式・事前研修会（北海道立北方四島交流センター：ニホロ）8月9日（木）

中・高生14名の訪問への思いを聞き、北方領土問題が次世代の若者にもしっかりと引き継が  
れていることを確信した。

元島民鈴木咲子さん（択捉出身）の話や北方館での説明、展示資料（日露通交条約、樺太千  
島交換条約、ポーツマス条約等）を見聞きし、北方四島が日本固有の領土であるという歴史的  
事実、そして、元島民の皆さんの四島返還への強い思いを改めて確認した。

また、元島民の鈴木さんや懇親会での根室市長さんの「この訪問がただの交流では意味がな  
い。四島返還に向け、一歩でも前進することを期待したい」という言葉に、この訪問に参加す  
ることの責任の重さを感じた。

「百聞は一見に如かず」。自分の目で今の択捉島の現状を確認し、択捉島に住むロシア人の思  
いや考え、訪問を通して肌で感じたことなどを少しでも多くの人に伝えることができるように、  
しっかりと体験してこようと決意を固めた。出航の際には、早朝にもかかわらず根室市長や関  
係者の方々の見送りを受け、一層その思いが強まった。



（四島のかけ橋 祈りの火）



（納沙布岬）

### 2 択捉島上陸1日目 8月11日（土）曇り時々晴れ

8月10日（金）9：10に根室港を出港。濃い霧により、歯舞群島、国後島はもちろんの  
こと、海も空も全く見えない状態であった。11日の朝には霧がすっきりと晴れ、択捉島がく  
っきりと見えた。いよいよ上陸だという実感が湧いてきた。

択捉島には、大型船が着くことのできる整備された港はなく、「はしけ」に乗って、択捉島  
の海の玄関口、内岡（なよか）に向かった。内岡から紗那の街までは、全く開発されていない  
自然のままの風景が辺り一面に広がっていた。



（択捉島散布山）



（はしけ）



（紗那の街までの風景）

#### (1) クリル地区行政府訪問

「クリル地区」議会議長兼地区長である、スペトロフさんより、歓迎のあいさつを受ける。  
クリル地区に地震の研究に来て以来21年間住んでいるそうである。この期間にいろいろな  
ことがあったこと、ビザなし訪問が始まって16年間になるが、訪問団を指白山（シウスヤ  
マ）の地熱発電所に連れていくのは今回が初めてであることなどを話された。

「クリル地区」に住むことにより、北方領土問題にかかわらざるを得なかったことが伺え  
た。



（クリル地区行政府）



（スペトロフ地区長）

(2) 芸術学校見学（地区の文化会館でもある）

週3回、絵、ダンス、コンピュータ、音楽、スポーツなどを教えている学校である。有料である。子どもたちは、学校が終わった後にこの学校に通ってくる。塾ではなく「学校」と名付けられている。教師は、教員の免許を持っており、普通の学校の教員と同じ待遇であり、今は、芸術学校も夏休みだそうだ。択捉島では、芸術に対する関心が高いのだろうかと思うが、学校教育に「図画工作」や「音楽」というの教科がないようである。室内には、「私たちの島」という題で描かれた作品が展示されていた。魚の絵を描いている作品が多く、水産加工が経済の中心をなしているこの島の特色を表していると思った。

(3) 郷土博物館見学

博物館といっても教室1室分に6,000点の資料がぎっしり展示されているだけであった。「人類」「自然」「生物」「開拓の歴史」の4つのコーナーがある。択捉島の原住民であるアイヌの生活の様子、日本人が暮らしていたときの様子や生活用品が展示されており、その説明をロシア人から聞くという不思議な体験をした。

(4) 指臼山、地熱発電所

これまでは、日本の援助で造られたディーゼル発電所から電力を供給していたが、電力不足や故障が多いことから、地熱発電所の開発を始めた。択捉島は千島火山帯に属しているのので、至る所から温泉が吹き出しても不思議ではない。開発に10年、2億5千万ルーブルをかけている。資本はすべてロシア政府が出しているとのことである。最終的には、地熱発電だけで全ての電力をまかないたいとのことで、3本の開発を進めている。第二発電所も90%は完成しており、第二発電所が完成すれば、紗那の街の100%以上の電力が供給できるということである。



(地熱発電所までの様子)



(地熱発電所)



(温泉が噴き出している様子)

(5) ホームヴィジット

団員が3~5名ずつに分かれて13の家庭にホームヴィジットした。2時間半ばかりの訪問だったが、「こんにちは」「ありがとう」「さようなら」ぐらいのロシア語しか知らない私たちにとっては、とても長い2時間半だった。

英語が通じるかもしれないと言われていたので、安心していただけだったが、私たちが訪問した家庭ではだれも英語を話すことができなかった。あわてふためいてロシア語会話集をひっぱり出した。自己紹介とプレゼント渡し、学校生活や好きなスポーツなどの話で、通訳さんが来られるまでの時間、5人で力を合わせなんとか乗り切った。

長男は今19歳なのだが、大学進学ではなく自分で選んで軍隊に入ったとのことである。軍隊に入れば、就職するときに有利だからだそうである。軍隊には17歳から入隊することができること、自分で好きな時期を選んで入隊できること、1年間半入隊しなければならないことなどが分かった。17歳で自分の進路をしっかりと決めていることに感心した。



(ホームヴィジット宅)



(有り余る料理でもてなすのが礼儀だそうだ)

(6) 商店視察

紗那の商店街を視察。見かけは民家と同じで、外見からはとても商店とは思えない。中には、酒やハム、ソーセージや調味料、お菓子などが売っている。野菜や魚は売っていない様子だった。自給自足なのだろうと思った。



(紗那の商店街)



(店内の様子)



(紗那の街並み)

(7) ギドロストロイ体育館視察

ロシア連邦最大手の水産加工会社「ギドロストロイ社」から、2000年にプレゼントされたという体育館を見学した。テニス、柔道、卓球、ビリヤードができる体育館である。トレーニングルームやシャワールームもあるということである。使用料は全て無料で、1日平均100人、多いときは200人ぐらいの利用者があるそうである。娯楽施設といっても他には何もなく、この体育館は、まさしく彼らへのすばらしい贈り物だと思った。

3 択捉島上陸2日目 8月12日(日) 雨のち曇り

(1) 水産加工場レイドボ視察(別飛)

「はしけ」に乗って再び内岡に上陸。その後、車で別飛に移動し水産加工場を見学した。ギドロストロイ社が2005年から工事を開始し、2006年から操業を開始したばかりの工場である。

港に降ろされた魚は海水といっしょにパイプで吸い上げ、工場まで運んでいること、一人は頭のカット、一人は内蔵を取り出すといった流れ作業により1日400トンの魚(今はカラフトマス、10月は白マス)をさばっていること、おひょうやすけそうだらも扱っていたが、今は、マスだけにしていること、冷凍庫の許容量は3,000トン、機械はほとんどがアメリカ製か韓国製であること、ロシア、韓国、中国、日本などへ輸出していること、12月~3月までは天候が悪い、氷が張るなどの理由で操業はしないこと、従業員数は360人ぐらいでツーフットで働いていること、ワンシフト170人~180人、12時間労働で、休憩は前半15分、後半15分の30分しかないこと、従業員の70%が女性、地元出身者は20%しかおらず、その他はサハリン、ロシアからの出稼ぎやバイト学生であること、従業員寮を完備していることなどを伺った。

ギドロストロイ社のおかげで、択捉島の経済が安定しており、黒字経済なのだということがよく分かった。



(ギドロストロイ水産加工場)



(工場内)

(2) 紗那日本人墓地 墓参

小高い丘にロシア人墓地に混じって、日本人墓地が点在していた。元島民の鈴木さんが、島を追い出されてから初めて択捉島に戻ったときには、住んでいた家が壊され、墓もどこにあるか分からない状態で悔しい思いをしたと語られたことを思い出した。

戦後62年、戦争は忘れ去られつつあるが、この墓地の有様を見ると、戦争の悲惨さ、未だに終戦を迎えられない人、未だに苦しんでおられる方が多いのだということを改めて感じた。



(日本人墓地)



(日本人墓地の碑)



(ロシア人墓地)

(3) 対話集会・歴史資料館視察（紗那中学校）

我々訪問団の最大の目的である対話集会が始まった。テーマは「教育問題と家庭教育」であるが、なんとか領土問題に触れたいというのが、私たちの願いであった。

① 教育問題と家庭教育について

クリル地区教育・文化・スポーツ課長のシュルプさんから、教育制度について説明を受けた。初等教育は7歳から始まる。就学前（1歳から6歳まで）は保育園や幼稚園に通う。1年生から4年生までが初等教育、5年生から9年生までが前期中等教育で、ここまでが義務教育である。10年生と11年生は後期中等教育を受ける。ほとんどが大学進学を目指している者である。11年生を卒業すると、完全中等教育修了証がもらえる。中等教育を終えると中等職業学校、高等職業学校、大学、軍隊などの進路が考えられる。中等職業学校までは無料、高等職業学校や大学も無料で行くことができるということである。

択捉島には高等教育機関（大学）がないので、大学進学者は島を出ることになる。大学卒業後はぜひこの島に戻り、身に付けた高い知識をこの島のために生かしてくれることを願っているとのことであった。

中等教育の目的は、よい大学への進学率を高めることで、そのために、質の高い教育、質の高い教員が求められている。現在、ロシアでも教育改革が進められており、大学入試が、選択式の全国共通テストになるということである。選択式になると、子供たちの考える力が低下するのではないかととても心配しておられた。学習意欲の低下はロシアでも大きな問題であり、1年生から3年生までの教育をしっかりとしないといけなさと考えているとのことであった。

保護者と連携・協力にも課題がある。例えば喫煙問題。両親がそろって喫煙している家庭では、子どもが喫煙しても叱らない、煙草を買うお金まで与えてしまうので、なかなか改善できない実態があるとのことである。

郷土愛、教育の質、教員の質、学習意欲の低下、基本的な生活習慣の定着、保護者との連携・協力の難しさなど、私たちが今抱えている問題と全く同じであり大変興味深い話であった。

② 北方領土問題について

北方領土問題については、校内の歴史資料館にロシア連邦の歴史についての資料がきちんと整備されており、子どもたちはそこでしっかり学んでいるとのことである。

この資料館にもギドロストロイ社が、郷土愛をもつようにと、お金を出資しているとのことである。コンピュータや机、いすなどはそのお金で購入された物であった。

私たちがそこへ移動し、ロシアの子どもたちがどのように学んでいるかを教えてもらった。択捉島には最初誰が住んでおり、誰が発見し、誰が開拓したか、下田条約についてもコピーがあるので子どもたちはそれを読んでいるとのことである。

第2次世界大戦前まではここは「紗那」と呼ばれていて日本人が住んでいた。電力が北海道から引かれていて、北海道との直結の電話があったことも分かっている。しかし、第2次世界大戦後、帰属が変わり、ロシアの領土になってクリル地区と呼ばれるようになった。1947年までの1年間は日本人といっしょに暮らしていたことなどをしっかり教えているという説明であった。

③ ビザなし交流の目的と成果について

交流に行った子どもたちの写真を掲示し、ありのままを伝えている。訪問した子どもたちの話を聞き、行っていない子はとてもうらやましく思い、「訪問したい」と言っているとのことである。

ビザなし交流の目的に関しては、日本とロシアと平和と安定、協力の保障、善隣関係の発展だと感じている。1992年の第1回の交流から見ると、確実に温度差が出てきている。平和的であり温かく、目の輝きが違う。お互い幸せに暮らしていかなければならないと思っていると述べられた。

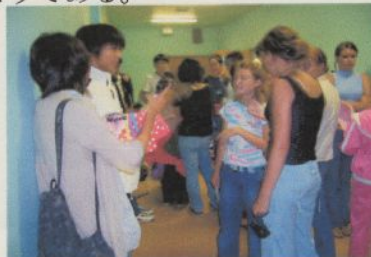
④ 北方領土が日本固有の領土であるという考えについて

いろいろな見解があることは知っているが、学校ではロシア政府の正式見解を教えており、北方領土問題については、他国でも起こっている領土問題の1つに過ぎないと教えているとのことである。

このような教育を受けている択捉島の子どもたちではあるが、日本の子どもたちとスポーツを通して交流し、とても親しみをもったようである。



(対話集会)



(交流する日本とロシアの子どもたち)

#### 4 根室港へ向けて出港 12日(日)ロシア時間で19時45分

出域手続きをしなければならない国後島古釜布湾に向け出港。

13日朝7時10分(ロシア時間)国後島古釜布湾に投錨。霧が晴れ、往路には全く見えなかった国後島がはっきり見えた。船から見える様子から、古釜布は択捉島の紗那の街よりずいぶん大きいことが分かる。実際、古釜布だけで約6、200人住んでいる。(択捉島全体の人口は約7、000人)

9時40分(ロシア時間)根室港へ向け出港した。霧はなく、海も大変穏やかで気持ちが良い。イルカの群れもたくさんおり、イルカショーも見られた。



(出域手続きにやって来る  
ロシアの関係者)



(国後島)



(国後古釜布)

#### 5 感想

3泊4日の滞在で困ったのは、2時間の時差である。根室で7時半ごろ朝食を食べたのに、10時半には、昼食を食べなければならない。(ロシア時間では12時半なので当たり前なのであるが)毎朝4時前に起床し5時半には朝食を食べる。たった2時間の時差ではあるが、体内時計を合わせるのに大変苦労した。択捉島ではトイレ事情も大変に悪い。水洗トイレなのだが、水が出ない。手も洗えない。除菌用のウエットティッシュが大変役立った。舗装されていない道路、ゴミが至る所に散乱しているといった状態で、決して生活環境が良いとは言えないが、携帯電話は普及しており、高校生も持っている。日本の昭和30年代の生活と現在の生活が混在している不思議な所であると思った。

ロシア語が全く話せない私たちが温かく迎え入れ、お世話してくださった、択捉島の皆さんの心優しさを身にしみて感じた2日間でもあった。択捉島で生まれ育った子どもたち、ずっと住み続けているロシア人にとっても択捉は故郷であり、故郷を大切に思う心は、日本人もロシア人も同じである。しかし、ロシアには、愛する国は武力で守るという考えがあり、そこは日本とは違うと感じた。

クリル地区発展開発計画が開始され、地熱発電所の開発、空港の整備、道路の舗装、港に栈橋を造り「はしけ」に乗らなくても大型船が着くことができるようにするなど、莫大なお金を賭けて開発が進められようとしている。「北方領土は第2次世界大戦後、帰属が変わりロシアの領土になったのだ」と歴史的事実まで変えてきたこの島も、今まさに変わりつつある。北方領土返還問題には、難しい課題がたくさんあると感じた。

このような貴重な体験の場を与えていただいた私に、一体何ができるのであろうか。大きな責任を感じるばかりである。今私にできることは、択捉島で見たこと、感じたことを少しでも多くの方々に、そして次世代を担う子どもたちに伝えていくことである。また、「私に何ができるのかを問い続ける」ことにより「返還への願いを消さない」ことが私の使命だと感じている。

北方領土問題対策協会の皆さん、通訳の皆さん、「ロサ・ルゴサ」のクルーの皆さん、択捉島でお世話してくださったロシア人の皆さん、そして、5日間生活を共にした団員の皆さんには、心から感謝の言葉を述べたい。ありがとうございました。